

読書通信



No. 200

① なんとか2000回の節目を迎えた。16年前、理事長時代に始めてからざっと800冊、おかげさまでたくさんのお書に出会えた。激励の言葉を折りたたんだからこそ続いたのだろう。もう少しばかりもお役に立てればと思う。

② デジタル一辺倒の世界は危ないのではない。そう心配していたところに堤未果『デジタル・ファシズム』（NHK出版新書、968円）が目に入った。スーパーシティこと丸ごとデジタル化された街（中国が先行）は落とし穴だらけ、効率追求のデジタル政府（エストニアなど）

はとてつもなく危うい、キャッシュレス化世界一の韓国はカード地獄でもある、などの事例はしつかり頭に入れておく必要があると感じた。いちばんショックだったのは「教育のデジタル化」だ。生徒の膨大なデータをグーグルが収集する、ベンチャーが教育を投資商品にする、AI教師で生身の先生はいらなくなる、生徒たちはタブレットのおかげで考えなくて済むようになる、などという話を読んで、デジタルと権力が一体化した世界の怖さはひとしおでなかった。広く読まれるべき問題提起の書と思う。

③ 異なる意見に耳を傾けずしかも常に説明不足だったという点で安倍、菅両政権は似たもの同士であり、官邸官僚を跋扈させた点でも強い相似性をもっていた。森功『墜落「官邸一強支

配』はなぜ崩れたのか』（文藝春秋、1815円）は、コロナ対策がなぜ迷走したのか、五輪開催強行の裏側に何があったのか、政治の私物化がどのように進んだのかなどを、綿密な取材によって政権周辺から描いて読み応え十分だ。

安倍政権で「総理の分身」の異名をとった今井尚哉、警察OBとして凄みを發揮した杉田和博、菅政権で強権を振るった和泉洋人など多くの官邸官僚が登場し、官僚ににらみを利かせ、政策を立案し、政治家さえも手玉にとる。官邸官僚政治極まれの感があるが、ここまで政権は劣化していたのかと改めて愕然としてしまった。

④ 幼心に悠々とB29は空を飛んでいた。46万人もの日本人があつた空襲で死んだ。なぜ無差別爆撃は延々と続いたのか。鈴木冬悠人『日本大

空襲「実行犯」の告白』（新潮新書、836円）は膨大な文書に拠り米軍内部の葛藤を詳細に描いた。陸軍からの独立を果たすため航空軍は何としても成果を上げなければならなかった。そんな軍部独走の怖さが白日の下にさらされる。

⑤ ワクチン接種が済んで一安心の方には申し訳ないが、岡田正彦『大丈夫か、新型ワクチン』（花伝社、1320円）はPCRの専門家がワクチンの問題を多面的に述べている。最大の問題はファイザーなどのワクチンがたった数カ月で製品化され長期的な安全性が検証されていないことで、ワクチンの有効性についても厳しい指摘がある。接種が進んだので万々歳というには遠いらしい。河野担当相や分科会の委員の反論をぜひ聞きたいものである。（浅野 純次）